

和漢脩身書

河村與一郎編輯

卷四

71  
259

大日本圖書				東 新書門 3
一 〇 册	四 號	一 架	一 八 函	
册				

K110.1  
39  
4

田中芳男閱正

河村與一郎編輯  
櫻戸玉緒校字

# 和漢脩身書

版權免許

文求堂藏版

## 和漢修身書卷四

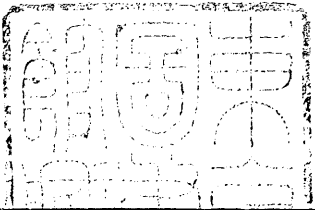
田中芳男閱正

河村與一郎編輯  
櫻戸玉緒校字

### 第一章

○孝子の親に事ふるや。居ふに則ち其敬を致し。養ふに則ち其樂を致し。疾にも則ち其憂を致し。喪ふに則ち其

禮記



和漢修身書

卷四

一

說郭

哀を致し。祭にを則其敬を致す。

○孝子忠臣代固より之あり。惟子能く父の心に合ひ。惟臣よく君の

心不合ふものも。能し難と云ひ。

中江  
藤樹  
訓

○人間千萬れ迷皆私より起ます。

私ハ我身を。わが物と思ふより起

ます。孝と其私をやぶりとける。主

章  
習

人公なり。

○親或ハ怒るあらむ。敬て以て之

を受け。抗もる勿く。對する勿く。顔

色怡々たれ。

全

○親或も過りくむ。必諫言を進め。

語を欵に。顔を和げ。以て事端

を陳べ。遠不指斥と爲勿も。遠不揚

白するなかれ。

全

○親遠方に在るべ。勤て書尺を致し。恒ふ心思と加へ。以て憂へ以て憶へ。

全

○父母一氣我弟昆を生み。同胞同枝一門ふ長む。嫡庶あれども皆我父に出づ。友愛偏ふも。大義斯著る

全

○衣え則傳へ服し。食へ則共小嘗め。學へ則業を連ね。遊べ則方と共ふん。兄前弟後。兄座し弟立ち。怡とて和む。雍々として集まる。

全

○美あまむ必譲る。業らむ必傳へ。善らねば必教へ。過あれども必言

忠孝

ふ。

○兄と其弟を愛し。弟は其兄と敬ひ。怨むふと怒るなく。奪ふと争ふ勿き。

第二章

忠

○忠は公中なり。至公にして私ふとある。天に私なく四時行はる。地に私なく萬物生じ。人に私なく大

全

に私なく萬物生じ。人に私なく大ふ亭り貞。

○其身に一なるは忠乃始なり。其家に一なるは忠の中なる。其國に一なるは忠の終なり。身は一なるは忠。則ち百禄至る。家に一なるは忠。則ち六親和し。國は一なるは忠。則ち萬人理ま

忠經

は。

○君の法度を祇し承け。孝弟と其家不行あり。稼穡不服勤して。以て王賦に供も。此兆民の忠あり。

孝

○其君小事ふる者も。事を擇び。よく之に安んじ。忠の盛なるも。

漢劉向封事

○忠臣も畎畝不在といへども。猶ホ

宋司馬溫公言

君を忘れど。倦々の義ある。

○忠臣の君小事ふは。や。其難を所を責むべ。則其易を者。勞せんとして正し。其短を所を補む。つむ。則其長を者。勸むべ。して遂ぐ。

第三章

○仁者八人を愛も。禮ある者も人

學

を敬む。人を愛ひる者も。人恒ふ之  
我愛ひ。人と敬む者も。人恒に之  
と敬す。

讒

○厚と者ハ。人を損じて。以て自益  
をせむ。仁者も。軀を危くして。以て  
名と要めむ。故ふ人の邪を覆ふ者  
も。厚の行もいなるも。人の過を救ふ

性理  
大全

もれも。仁の道なる也。

○仁とを。天地萬物を生む所の心。  
人之を得て以て心とし。義禮智信  
の理。皆中に具はせて。心の全徳と  
なる者也。此人心の固有せる所と  
いへども。然も學者。苟も存養體驗  
の功ふけきむ。則ち氣質物欲。以て之

晉語

を蔽ふありて。以て其體の實已ぶ  
有可<sub>レ</sub>分と。識るをな<sub>レ</sub>し。

○義と利の足なき。貪は怨の本な  
り。義を廢されば。則ち利立たば。厚く  
貪ぶるを。則ち怨を生ず。

○義生より重くば。生と舍て可な  
り。生義より重くば。生を全として

後漢書  
杜傳

牧民  
心鑑

可也。

○禮を分より大なるは莫く。分を  
名より大なるはなし。故に名に貴  
賤の殊あるを。則ち分高下は別あ  
り。人の上となつても。復ち吾上に在  
者あり。人の下となつても。復ち吾下  
に居る者あり。故に吾上は居く。下



人の禮を。我小盡と欲せむ。則吾  
上たる者。亦必吾禮を。彼小盡すと  
欲む。此理勢の必然。禮分れ定る所  
所なり。

家道訓

○禮を行ふも。むつわしく苦と  
しにあはれ。事毎小行なふづき。と  
ぢめに従ひて。行ふ故。心安く

魏劉  
物人志

譚子

まゝ身の行穩やのなり。正路の平  
地を行くが如し。

○智を明ふ出づ。明の人ふ於る。猶  
晝の白日を待ち。夜れ燭火と待つ  
が如し。其明益盛なるを。見る  
所遠きに及ぶ。

○智通どれも。則變多し。故に之小

牧民  
心鑑

授る不。信を以てと。信とて萬物と成との道なり。

○人として誠ありとせむ。君子に非ど。凡人と交ける不。一言と不信なれど。必吾を視て虚詐の徒とせん。一事も不信あまば。必吾と視る無徳の輩とせむ。

子夏  
語

### 第四章

○日小其上と所を知り。月に其能とする所を忘るゝある。學と好むとふたぎをせむ。

荀子

○學ハ己むづつとせむ。青と藍より出で。藍より青く。氷を水より凍出で。水より寒し。

漢諸明子  
書識

○學不非げまを。以て才を廣むる  
あり。志に非ざれを。以て學と成を  
なし。惰慢あるまじ。則ち精を勵まひ能  
む。險燥あるを。則ち性と治むる能  
け。年時と馳せ意歳と去る。遂ふ  
枯落となり。窮廬不悲歎すとも。將  
復何ぞ及むん。

唐白  
樂天  
勸學  
詩

○田あれども。耕まを。倉廩虚  
し。書たまを。教つごま。子孫愚  
なる。

宋揚  
文公  
家訓

○童稚の學も。記誦不止ま。其  
良知良能を養ふ。當に先入の言  
を。主とす。

歷代  
名臣  
要覽

○勉強して學問を。則ち聞見博

とて。知益明も字。勉強して道を行ふつも。則徳日に起て大不功あり。

清張孝先要言

○書卷浩繁といつども。第能く日新の功を加つても。何ぞ至らげると患つて。諺云。絲を積で。縷を成し。寸を積で。尺を成ると。寸尺已まざるを。

遂に丈匹となす。此言小といつども。以て大不喻ふべし。

第五章

説苑

○智不毒あるは。酒より甚しきにあく。事と留むるを。樂より甚しきに。はやく。廉を毀ると。色より甚しきをぬく。

歷代名臣要覽

北魏崔謙子

○孤疑の心を執ふ者ハ。讒賊の口を来し。不斷の意を持つとせむ。群枉の門を開く。

○恭儉を福の輿。傲侈を禍の機ふ。福輿に乗ざる者ハ。侵やく以て康休。禍機を踏むものも。忽而不傾覆と。誠しめざるべからんや。

晋羊祜子書

○恭と徳の首たき。慎ハ行の基なり。願ふ汝等。言則忠信。行則篤敬。もし。口人小評を以て財を以てする無かれ。不經の語を傳ふ無きと。毀譽の語と聽とふらま。人の過を聞かど。耳受るを得ず。口宣ぶると得ざれ。思ふく後小動け。若言行信

もく。身大謗を受け。自ら刑論ふ入  
らむ。豈復汝と惜むのみふらんや。  
耻祖考ふ及むん。

第六章

○人の事を處する。能く常ふ往事  
の非を悔ひ。常に前日の失と悔ひ。  
常ふ往事の。未だ知識あらずるを

世範

悔ひむ。其徳の進む。所謂日々益加  
つ。自ら知らざるをれあり。

慎思

○人其過を知るもの寡し。此過と  
知るを難しとひ。過を知て。能改む  
る者最難しとを。故に自ら過を知  
て。能改ため。過と聞て則喜ぶ者。皆  
貴ぶづ。とをのみ。

○人聖人小非を誰か過たからん。過ありといつやも之を知り能改たえん。過あるに歸を故小人の過ある。以て恥とする所小なり。苟も私意蔽固すまを。則過ありといども之を知る能はば之を知るといども又改むる能はば以て

恥づることある所あり。其過ある時小方。以て過小非をとして。遮護掩藏をづつ。須く直小己が過として顯揚し。速小之を改たむるし。然も則其心術に於て分毫も損闕する所なく。何の恥るふとか之ありん。

尊

○頭歩止まらざれば。跛鯨を千里。累土輟げまじむ。丘山を崇成を。

東漢陳寔語

○人自ら勉めざるべし。不善の人。未だ必しえ本悪あらざり。習性ことなるふ事。

慎思録

○事物の應接煩多といへども。皆是吾人當不為すべき所の分内れ

産語

事あり。但序ふ循ふく。漸く為さむ。則苦心勞力の患あるとして。行を果し事と成をれ功あり。

○糞水を掬せざれば。善農く成る能はず。筋脉と斷ざらば。善工と成る能はず。肩背を傷らざらば。善賈と成る能はず。死地を踏ばざらば。善



家道訓

士となるるはくはず。

○思業せどほも。過の本あり。私欲深らる。身と殺との本あり。怒と恐びとふい。争の本なり。儉約あらず。困窮の本あり。

○人の子ふ於る。其之をやしあふに限あらず。其子をもく。之と受て

産語

全

辭せび。丁年に至りて。猶奮<sup>ホ</sup>之を知らむ。一旦其依る所を失ふ。以て窮餓不至る者之あり。

○愚者初めよ。生を治むるとし。らび。怠惰安佚。費用節ふ。其窮乏に及び。奔走乞食し。死に幾くして。活を求む。譬も渴る。井を鑿り。飢

て粟を種るが如し。亦晚うゝずや。

第七章

老子

○聰明深察しして。死に近づく者も。好んぶ人の非を議とれバあり。博辯宏大にして。其身と危ふくも。侮とれま。人の惡を發とれまなり。

求言録

○事古つを師とせざま。則ナ流俗

明呂叔簡呻吟語

の弊を免るゝあたはず。言聖賢と本とせざま。則ナ或を將異端小陥らん。

○言語の惡を。造誣する大なるも。莫く。行事の惡ハ。苛刻より大あるは。莫く。心術の惡も。深險する大あるも。

淮南子

○小快ハ義を害し。小慧ハ道を害し。小辨と治と害し。苛削と徳と傷る。

後漢書

○良薬ハ口小苦けまじきも。病小利あり。忠言と耳に逆つども。行ひ小便あるま。

貞觀政要

○古つを以て鑑といひまを以て興

老子

替を知るべし。人をもつて鑑といれども。以て得失と明らせずし。

○良賈ハ深く藏めて。虚あるが如く。君子も盛徳少く。容兒愚なるが如し。

從政名言

○一事と為きた方り。即ち人の知らんことを欲するを。浅の尤ある

全

慎思錄

者。

○大丈夫の心事。當ナ青天白日。如くふるズ。人をシて得く。之を見せしめて可キある。

○官禄を已ハふ如クなる者ヲを以テ己トと視スむ。則チ自ら以テ餘ありとし。日々喜樂トぶシ。才徳ハ已ハふ逾ス。

宋陸  
梭山  
居家  
正本  
制用  
篇

俗者を以テ己トと視スむ。則チ自ら以テ足らざるトして。日々勉強トぶシ。  
○夫を利を謀テ。遂ル者百一ナらズ。名と謀テ。遂ル者千一ナらズ。今の世不慮トる者ノ百年ある能ハはざる。而シテ乃チ百一ナらズ。千一ナらズ。ざる事トと微幸ト。豈痴甚ナらズ。びや。

牧民  
忠告

○名節の人ふ於る。金幣ありげし  
て富み。軒冕ならざして貴し。士の  
名節あり。猶女の不貞なるが如し。  
則何の暴か従はざらん。何の美の  
附ざらん。他美ありとも。亦贖ふに  
足らば。故小前輩謂ふ。爵禄ハ得易  
く。名節ハ保らがたし。爵禄或を失

ふも。時ありて再び来る。名節一た  
び虧けば終身復せず。

とあるをまき  


和漢修身書卷四終

和漢修身書 卷四 二十

# 版權免許

明治十五年十月七日  
同十六年十月刻成發兌

定價七錢

編輯者

京都府平民  
河村與一  
上京區第五組西三防堀川町五番九番地

出版人

京都府平民  
田中治兵衛  
下京區第五組寺町篠生太本寄大番戸

發兌人

大阪府平民  
柳原喜兵衛  
大阪東區北久太郎町四丁目十五番地

# 和漢脩身書

河村與一郎編輯

卷五

71  
259

館			
館藏書會育影本日大			
一	四	一	一
〇	冊	架	八
冊	號	函	函
			新書門

K 110.1  
39  
5